法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-10-16

〈講演：琉球文学の先端的研究〉琉歌における「天」について

ウルバノヴァー，ヤナ

(出版者 / Publisher)
法政大学国文学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
日本文学誌要
(巻 / Volume)
107
(開始ページ / Start Page)
13
(終了ページ / End Page)
18
(発行年 / Year)
2023-03-24

〈講演：琉球文学の先端的研究〉

琉歌における「天」について

ヤナ・ウルバノヴァー

皆さん、こんにちは。ヤナ・ウルバノヴァーと申します。本日は国文学会大会において発表できる機会を与えて頂きまして大変光栄に思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

はじめに

琉球において神の天上世界を指す「オボツ・カグラ」という表現を、語学の観点および民俗学の観点から論考を進められた間宮厚司先生と福寛美先生の講演に続いて、私のパートでは、琉球文学の抒情歌である琉歌を中心に天上世界の観念について文学の観点から考察を進めることにします。

一　『おもろさうし』や沖縄古謡における天上世界の観念

一五三一年から一六二三年にわたり琉球王国の首里王府によって編纂された叙事歌謡集『おもろさうし』（全二十二巻）のオモロの中には「オボツ」と「カグラ」という表現が数多く見られます。『おもろさうし辞典・総索引（第二版）』は、「オボツ」を「天上の神の在所。神のいます所という意で天上をさす。地理的空間ではなく観念的な空間」[1]と説明し、またその対語である「カグラ」を「天上の神の在所。神くら。神の座。地上に対応して観念化された天上世界のこと」[2]と解説しています。首里王府の祭祀で歌われ、叙事的・呪祷的側面が強いオモロでは、常に地上世

界と対応している抽象的な天上世界としての「オボツ・カグラ」が重要な観念の一つとなっています。

なお、オモロの世界においては「オボツ・カグラ」と共に「ニライ・カナイ」や「アマミヤ・シネリヤ」が重要な他界観を提示しています。また、「オボツ・カグラ」のような、天上世界の観念が、オモロにおいて「天」と表現されたりもします。

琉球における「天」の観念に関して研究を進めた呉海寧氏によれば、オモロにおける「天」の観念は次のように分類できます。

① 自然の天空を意味する「天」
② 抽象的な「天上世界」、超越的な存在を意味する「天」
③ 天下、世の中を意味する「天」
④ 美称辞として用いる「天」
※ ④における「天」は、国王の美称辞、太陽神及び太陽の美称辞、神女の美称辞などにさらに細かく分類されています。

これらの四つのグループを前提にすれば、地上世界と対応して構造化された抽象的な天上世界の特徴を持つ「オボツ・カグラ」に比べて、オモロにおける「天」の意味の幅はより広くなっています。オモロの「天」は神がおられる「天上世界」を意味する以外に、目に見える物理の空間を表し、それと関連する「雨」、「雪」の自然景物や「太陽」の天体とも深い関係を示しています。それらのオモロの中では、豊作をもたらす天（空）の恵みが歌われ、米が、さも「雨」や「雪」が降るかのように天からもたらされる想いが込められます。また、天に照っている「太陽」は「天」と共に国王の美称辞として用いられ、国王の存在が太陽に喩えられる他、国王の長寿や国家の繁栄を祈る場面が多く詠まれます。このように、①③④のオモロは具体的な地上世界の治世、豊作などを自然の天空を意味する「天」と結びつけている一方、神秘的な天上世界を指す「天」と関連する②のオモロでは、神女の聞得大君が天上の神に祈り、高い霊力を降ろし国王を守護する場面などが歌われ、抽象的な天上世界が描かれます。②のオモロにおける「天」の観念は「オボツ・カグラ」の観念と類似性をもつと言えます。

他方、琉球王国の中心である首里王府によって編纂されたオモロと比べて、庶民の間に広がった叙事的な沖縄古謡に関しては、呉氏が次のように指摘しています。[3]

民間レベルのオタカベ、クェーナ等にみられる「天」の観念は、雨乞いや稲の豊作祈願等のように、いわゆる一般の人々の生活に緊密に関連していることがよくわかる。言い換えれば、王権の正統性を強調するために用いられる「天」の観念と比べて、民間レベルの「天」

の観念はそれほど抽象的ではなく、より具体化、具象化しているといえよう。

このように、昔から庶民の間で伝承されてきた沖縄古謡は、首里王府のオモロにおける「天」の観念とほぼ共通していますが、古謡の特徴としては豊作の祈願を中心とする場面が多く、遠い国王の存在より、日常生活に密着したより身近にある農作物のために雨を降らせようとする強い願いを表す雨乞いの歌のほうが「天」と深く結びついています。

それでは、同じように民間レベルで普及した沖縄の抒情歌である琉歌においては、天上世界の観念はどのようになっているのでしょうか。先行研究では、沖縄本島の琉球文学に関してはオモロ、古謡、組踊などを中心に「オボツ・カグラ」、「天」などの観念について指摘がなされていますが、琉歌に関してはいまだ詳しい調査が及んでいないため考察を進めます。

なお、本研究の琉歌テキストとして、島袋盛敏・翁長俊郎『標音評釈 琉歌全集』（五版、武蔵野書院、一九九五年）を使用しています（以下、『琉歌全集』と表記）。

二　琉歌における天上世界の観念

琉歌は、沖縄本島で生まれた、定型化された抒情歌であり、その基本的な形式は、八八八六の四句から成る音数律です。琉歌は沖縄本島の首里方言を基本とし、歌語を含みながら、詠まれるというよりは三線（サンシン）などの楽器に伴奏されて歌われるものとして知られています。中には琉球士族や著名な歌人の歌も多数見られますが、琉歌は口承で伝承されていたため、作者不明の歌が多く、琉歌の創作年次も未詳です。「琉歌」という単語を記録した最も古い文献は、おもろ語辞書『混効験集』（一七一一年）です。[4] また、その前にも一六八三年に遡る琉歌形式を持つ歌に関することは、座間味景典（ざまみけいてん）の家譜に記されています。[5] この記録からすると、琉歌は十七世紀にはすでに存在していた比較的新しいジャンルの歌であることになります。

前述のように、オモロにおいては天上世界の観念を表す語として、「オボツ・カグラ」と共に「天」という表現が見られますが、琉歌には「オボツ・カグラ」という語は見当たりません。さらに、オモロにおける他界観を意味する「ニライ・カナイ」、「アマミヤ・シネリヤ」も琉歌では詠まれていません。琉歌における天上世界を代表する語としては、「天」に限られます。

「天」という表現を含んだ『琉歌全集』の琉歌四三首を分析した結果、それらの琉歌における「天」の意味は次の三つのグループに分類できます。

①　国王の美称辞として用いる「天」

② 抽象的な「天上世界」、超越的な存在を意味する「天」
③ 自然の天空を意味する「天」

これらのグループを通観すると、先行研究におけるオモロの「天」の観念に非常に類似した印象を受けます。しかし、琉歌における「天」の観念はオモロとの共通点の他、独自性も大きいと考えます。それぞれのグループについて説明します。

① 国王の美称辞として用いる「天」

「天」を含んだ表現が国王の美称辞として用いられる琉歌は、最も多く、二五首（約六割）となっています。オモロと同じ美称辞「天がなし」や「天ぎやなし」が大多数を占め、ほとんどが「首里」の接尾語として付いていますが、四首においては「首里がなし天」「首里ぎやなし天」という琉歌独特の表現が見られます。

また内容に関しては、国王の長寿の祈願やお祝いが歌われる点がオモロと共通しているものの、祈祷する神女や神の姿は一切詠まれず、一般庶民である個人の観点から歌を歌うという特徴が見られます。その代表的な場面として「（個人として）国王の顔を拝みたい」という希望や心を弾ませるような気持ちが最も多く詠まれます。

② 抽象的な「天上世界」、超越的な存在を意味する「天」

このグループには一〇首（約二割）の歌があります。琉歌における天上世界の特徴としては、オモロと異なり、神や神女の存在が歌われず、天に対する個人の祈願や心的傾向が多く込められます。その背景には儒教や倫理の観念が強く窺えます。

▼『琉歌全集』二六一番歌（歌人　名護親方寵文）

表記　かくさてやりすれば　天と地や鏡　はづかしや影の　うつらとめば

発音　カクサテイスィリバ　ティントゥジヤカガミ
ハズィカシヤカジヌ　ウツィラトゥミバ

解釈　悪い考えや行為をかくそうとすれば、天と地は鏡で、影がちゃんと写っているだろうと思うと恥ずかしい。

この琉歌からは神様に対する想いのではなく、天そのものに対する想いが込められ、背景には道徳の重要さが読み取れます。

③ 自然の天空を意味する「天」

このグループには八首（約二割）の琉歌があります。オモロや沖縄古謡と違う点は、「天」を含んだ③のグループの琉歌においては豊作の祈願が歌われず、さらに「雨」「雪」などの場面も見当たらないことです。また、ここにも①と

②のグループと同様に個人の心的傾向が強く窺えます。個人の希望、祈願、感情などがその代表的なものとなります。

▼『琉歌全集』二六二五番歌（歌人　安里安定）

表記　天の根の鷲と　能羽うち並べ　飛び回て見ぼしや
　　世界のはても

発音　ティンヌニヌワシトゥ　ヌファニウチナラビ
　　トゥビマワティミブシャ　シケヌハティン

解釈　天の傍近く飛ぶ鷲と羽を並べて、世界の果てまで
　　飛び回ってみたい。

この歌からは鳥のように自由になることを望んでいる個人の希望が強く読み取れます。

最後に、自然の天空を意味する「天」と深く結びついている「雨」「雪」などの自然景物について触れたいと思います。琉歌においては「雨」「雪」などが「天」という語と直接に呼応することはありませんが、オモロや沖縄古謡と同じように「雨」「雪」のもつ豊作や植物の繁栄をもたらす効果が琉歌にも多く歌われています。ただ、オモロ、沖縄古謡においては集団生活を維持するのに欠かせない農作物のために「雨」を降らせてほしいという場面が代表的であるのに対し、琉歌はそれにとどまらず、個人の事情のためにも「雨」を利用したいという願いが込められ、そういった雨などが「たより」（拠り所）にしているという個人の気持ちを歌うものも多く存在しています。また、「雪」に関しても、琉歌ではオモロと同じように「雪」がお米を象徴するものとして歌われます。それに加え、抒情歌の琉歌の特徴としては、「雪」の魅力、その美しい自然の姿への憧れがより一層強調される傾向にあります。

おわりに

オモロの天上世界を代表する「オボツ・カグラ」、「天」の観念と比較して、琉歌から読み取れる「天上世界」の観念にはいくつかの特徴があります。まず、オモロにおいて昔から詠まれていた「オボツ・カグラ」という観念が琉歌には存在せず、「天」という語のみが見られます。また、「天」を詠み込んだ琉歌においてもオモロと違って神女や神は登場せず、すべての祈願が民間のレベルで行われています。さらに、その内容も集団生活にとって不可欠な五穀豊穣や、中央政権にとって重要であった国王の長寿のお祈りなどに加え、個人の希望、悩み、楽しさなどの心的傾向を訴えるものも多く見られます。

結論として、生活の様々な場面において民間レベルで歌われ、個人の気持ちを歌に託した抒情の性質を持つ琉歌は、オモロとの間に共通点が見られるものの、首里王府によって編纂された叙事的歌謡のオモロと異なり、比較的新しい

ジャンルとしての琉歌の特徴が、本発表で示したように、「天上世界」の歌われ方にも大きく影響を与えたと考えます。

以上で私のパートを修了いたします。ありがとうございました。

注

（1）仲原善忠・外間守善『おもろさうし辞典・総索引（第二版）』角川書店、一九七八年、八七頁

（2）前掲『おもろさうし辞典・総索引（第二版）』、一〇五頁

（3）呉海寧『琉球における「天」の観念の基礎研究』沖縄県立芸術大学大学院平成二七年度博士学位論文、一六九頁

（4）外間守善『南島の抒情―琉歌』中央公論社、一九九五年、九頁

（5）嘉手苅千鶴子『おもろと琉歌の世界』森話社、二〇〇三年、二一頁

参考文献

嘉手苅千鶴子『おもろと琉歌の世界』森話社、二〇〇三年

呉海寧『琉球における「天」の観念の基礎研究』沖縄県立芸術大学大学院、平成二七年度博士学位論文

島袋盛敏・翁長俊郎『標音評釈 琉歌全集』（五版）、武蔵野書院、一九九五年

清水彰『標音校注 琉歌全集総索引』武蔵野書院、一九八四年

仲原善忠・外間守善『おもろさうし辞典・総索引（第二版）』角川書店、一九七八年

外間守善 校注『おもろさうし 上・下』岩波文庫、二〇〇〇年

外間守善『南島の抒情―琉歌』中央公論社、一九九五年

間宮厚司『沖縄古語の深層 オモロ語の探究』（増補版）、森話社、二〇一四年

（本学兼任講師）